

授業評価アンケートの「自由記述」を授業改善へ生かすために —大学研究センターの分析結果から—

佐野享子

ビジネス科学研究科助教授 大学研究センター

1. はじめに

本学ではTWINSを利用し、全学共通科目を対象とした学生の授業評価アンケートを毎学期ごとに実施しており、2005年度からは新たに自由記述欄が設けられた。筆者が所属する大学研究センターでは、自由記述の分析を担当するとともに、分析結果をもとにした今後の授業改善の方策等について、3月7日に開催された「第2回全学FD研修会」等において報告を行ってきたところである。詳細は学群教育室が刊行した報告書を参照いただくこととし、本稿ではそのあらし

についてご紹介したい。

今回は1学期に開催された授業を対象とし、共通科目における学生の授業への満足度向上の方途を探ることを目的として分析を行った。分析手法としては様々なものが考えられるが、今回はわかりやすく結果を公表することを意図し、KJ法を用いて整理を行った。具体的には当該授業に対し満足度が高いと回答した学生はどのような点が良かったと感じているか、あるいは満足度が低いと回答した学生はどのような点を改善して欲しいと感じているかをそれぞれ明

表 自由記述回答者数

	履修登録者数	回答者数	自由記述回答者数	自由記述回答者数			
				満足高	満足低	普通	
情報処理(講義)	1160	277	159	33	36	90	
国語	652	148	85	★57	17	11	
総合科目	6383	1410	850	411	115	324	
体育	5340	974	579	406	23	150	
外国語	12463	2172	英語 英語以外	701 382	273 210	138 23	290 149
教職科目	9325	843	467	192	88	187	

★「とても満足」と「満足」を「満足高」に、「不満」と「とても不満」を「満足低」に集計

らかにすることとし、満足度が高いと回答した者が記述した「良かった点」、及び満足度が低いと回答した者が記述した「改善して欲しい点」の記述を分析した。対象科目及び回答者数は表のとおりである。

2. 指摘が多い事項

以下では各科目区分ごとの特徴的な点について触れておきたい（かぎ括弧内は指摘数が多かった内容を筆者がとりまとめて報告書で記述した項目名）。

(1) 外国語

「授業の雰囲気が良い」、学ぶことが「楽しい」授業が評価されていた。しかしこのことをもって、学生の多くが楽な授業を求めていると解すべきではないだろう。「小テスト」「ホームワーク」がある授業に対しては、苦労はあるが力がついたと記述する学生が多く、楽な授業よりもやりがいのある授業が評価される傾向や、英語科目の改善して欲しい点として、「和訳だけの授業に疑問」「高校の授業と変わらない」などの点が指摘されるなど、高校では経験できなかった英語の授業を大学での授業に対して期待している傾向も、同時に見受けられたからである。

誤答の時に嫌味を言うなどといった「教員の態度」に萎縮することなく、学ぶこと自体が「楽しい」と感じられる授業を通じ

て、学習への内発的動機づけが高められているように思われる。なお英語の授業の一部において、特定の専門分野に偏った内容が取り上げられていたために、授業がわかりにくいとの指摘がなされている例も少なからず見られた。

(2) 情報（講義）

「説明がわかりやすい」「配布資料がわかりやすい」授業が評価される一方、改善して欲しい点として「授業の必要性がわからない」との指摘が少なくなかった。後者については記述こそ異なるものの同趣旨と思われる指摘も少なからず見られた。

(3) 国語

「論理的に書くことをめざす」授業や「実践的内容」の授業が評価され、「授業意図が不明」であったり「身についたことが少ない」「実践的でない」授業では、これらの点を改善して欲しいとする指摘があった。

(4) 総合科目

「様々な分野の教員で構成」されている点が良かったと指摘される一方で、教員間の連絡・調整の必要性に関わる指摘がなされている授業も少なくなく、オムニバス形式で進められることが多いこの科目の特徴が表れている。また専門外の学生や高校で関連分野を履修していない学生にとっても、理解が可能な難易度の設定が必要であることを示唆した指摘が見られた。

(5) 教職科目

内容そのものが「興味深い」授業や教員の「熱意がある」授業が評価されていた。授業の理解に関わる指摘も多く見られたが、内容が専門的でわからないという趣旨ではなく、話が「聞き取りづらい」などの理由で「授業が単調」であり、「何が重要かわからない」授業に対して満足度が低くなっていた。

(6) 体育

改善して欲しい点のみ集計したところ、実技の時間の増加を望む意見や、レベルに応じた指導を望む意見が見られた。

3. 自由記述をいかに活用するか

学生の自由記述は、授業科目ごとに共通科目責任教員に公表されており、授業担当教員も TWINS から当該担当授業の結果を閲覧することができる。学生の評価観は多様であり、各教員に寄せられた意見にも様々なものがあると思うが、専門的な知識を持たない学生が自分の授業をどのように受け止めているかを知る手段と考えると参考にすればよいだろう。

今回は、結果をフィードバックするために授業全体の傾向を明らかにすることを意図して自由記述の分析を行った。全学的に実施した自由記述によるアンケートの結果を分析して公表する取り組みは、他大学で

もほとんど例を見ないものと思われる。しかしこのようなねらいで授業全体の結果を分析することは必ずしも得策ではないと筆者は考えている。分析の過程で感じたことであるが、多くの科目区分で、満足度が高い学生が多くを占める教員の授業とそうでない授業とに顕著に分かれる傾向が見受けられた。したがって極めて特徴的な授業スタイルを持つ教員が数多くの学生を受け持っている場合には、授業の全てを対象として分析を行ったところで、それらの教員の授業の特徴が結果に顕著に反映されてしまう。自由記述の結果は、各教員自身が担当する科目の経年変化を捉えるために活用されるべきであろう。

授業の結果を学生にフィードバックするのであれば、個々の教員が学生の指摘に必ず目を通し、それらをどのように受け止めているかを現在受講している学生全体に直接フィードバックすることが有効である。これによって学生と教員とのコミュニケーションが図られるであろうし、意見を書く学生の側も、教員からの直接のフィードバックを期待し、現状よりも高い回答率でより真摯な内容の意見を寄せるに違いない。

また今回のように満足度の高低との関わりで分析を行った結果、板書や声の大きさ、視聴覚教材の利用等といった授業技術に関わる指摘よりも、科目の系統性・構造や授

業のねらい、授業の理解の度合い、内容など、カリキュラムを構成する要素に関わる指摘の占める割合が高くなる傾向が見られた。学生の授業への満足度を高めるためには、カリキュラムの改善に関わる事項を優先して改善を行うことが肝要と思われる。

カリキュラム改善にとって重要なのは、共通科目を担当する教員相互で意見交換を行い、寄せられた学生の意見をどのように受け止め、いかに授業改善に生かすのかをともに考える組織的な取り組みである。今回筆者は全学学群教職課程委員会から依頼を受け、結果の報告を行うとともに先生方と意見交換をさせていただく機会を持った。啓蒙型から相互研修型へとFDを発展させ、FDの組織化を図ることが、本学をはじめとする全国の大学において課題となっている。共通科目に限らず、学生に対する授業アンケート結果を議論の共通の土台とし、組織ごとのFD共同体を形成するツールとして活用することが重要であろう。

(さの たかこ/生涯学習論・大学教育学)